

10. 葬儀の変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6964

10. 葬儀の変遷

大根田 紀乃

1. はじめに
2. 西保地区の葬儀とその変化
3. 住民の意識、そして『葬儀の心得』なるものの存在
4. おわりに

1. はじめに

本調査実習の対象地である西保地区を訪れたとき、私は単純に嬉しかった。山があり、川があり、森があり、そして雄大な日本海があり。自然に囲まれたその地での生活に、人間と自然の本来の密着感を感じたからだ。そこには、大学とバイト先の往復を繰り返す私の日常生活では味わうことのできない、素朴な感動があった。そして、そんな中だからこそ聞き取り調査の中で耳にした様々な風習、人間的活動のそれぞれに心からの興味や関心がもてたのだと思う。

私は今回その中から葬儀という、誰にでもいずれ訪れる死に関しての儀礼、そしてその変遷について取り上げるわけだが、それもそんな自然と人間との密着感を意識できたからこそ、また聞き取り調査で主にうかがった、昔の、皆で作る形での葬儀に、人間ならではの儀礼の奥深さ、人間も自然の一部であるということを強く意識させられた結果である。

さて、これから本論に入っていくわけだが、昔の葬儀を中心とし、その変遷を辿るだけではなく、そこから、その背景にある時代や社会環境の変化、それに伴う住民の思い、現在西保地区が抱える問題などについて広く触れ、考えてゆけたらよいと思う。

2. 西保地区の葬儀とその変化

「真宗王国、石川県」の名に違わず、西保地区もまたそのほとんどの世帯が浄土真宗の門徒である。よって本稿では、この浄土真宗の教義を基本とした集落内での葬儀について触れてゆくことになる。

また現在と過去とを分けるターニングポイントとしては、約五十年前まで各集落に存在した火葬場を利用した葬儀を「以前」とし、それ以降の輪島市内の火葬場を利用した葬儀を「現在」とする。以下に記述する内容は、今調査実習の聞き取りによって得た情報を中心に、西保村史や浄土真宗大谷派出版の「葬儀の心得」を参考に構成するものである。

2-1. 葬儀を行う場所

以前、葬儀を行う場所としてはどの集落でも自宅を使用するのが主であった。どの家も伝統的な田型の間取りをした作りであり、ふすまを取り払えば葬儀を行うに十分なスペースが確保できたからだ。だが一口に葬儀といっても葬式だけ執り行えればよいわけではない。それに関する準備やその係がいるわけであり、集落内のものを主とした葬儀であっても、一軒の敷地内で利用できるスペースには限度がある。そのため、僧侶の食事場や待機場には隣家が、弔問客やお手伝いの食事場としては近所の親戚の家が貸し出されていた。

現在でも葬儀はほぼ自宅で行われる。しかし、会場に寺や斎場を借りるケースが増えてきているのも事実だ。これは高度経済成長期をピークに集落外との交流が深まり、それに伴って広がった人間関係に対応するだけのスペースが、近代的な、壁で各部屋を区切るようなつくりの家では確保できないこと、また、以前のように集落に手伝いを求めるのではなく、そのほとんどを葬儀屋に任せる葬儀形態に起因しているためである。

また集落での違いとしては、平成13(2001)年2月大沢町に西保コミュニティーセンターが誕生してからは大沢町の住民の葬儀に限っては、そこを借りて食事場とするようになった。調理スペースが足りない場合には外にひさしを出し、プロパンガスをひいて炊き出し等を行うそうだ。

2-2. 死～仮通夜

(1) 以前のあり方

死者がでると、まずは同じ地区内の親戚に訃報が伝えられる。連絡には原則人足を用い、電話は極力避けられた。連絡を受けた者は死者の出た家へと集まり、お勝手、雑務、賄いなど人足割の相談を行う。このとき選ばれるお勝手仕事の女総取締役を「お勝手親方」、男の総取締役を「オヤッサマ」という。亡くなった時間が深夜であれば、この人足割りは翌日に持ち越されることもあったそうだ。

また、親類、縁者への連絡と平行して行われるのが、壇那寺への報告である。その連絡役を担ったものは御仏供米(オブクマイ)を1升から2升持ち、本堂へと参ってから住職に訃報を伝える。これは時間を問わず行われ、住職が深夜たたき起こされることもあったそうだ。そしてそのまま連絡係は住職を家へと連れてゆき、「枕づとめ」を行ってもらう。この「枕づとめ」は、枕経、枕直し勤行とも呼ばれ、納棺前に枕元で行われる最初の勤行であり、遺体に向かってではなく、仏壇に向かって行われる。礼拝・帰依の対象、つまりご本尊は基本的にあくまでも阿弥陀如来であり、どんな場合でも遺体のみに対してのおつとめは行わない、という浄土真宗の基本からである。その後、住職を交えて血縁者で葬儀の日程、段取りの話し合いが行われる。これは、第一に住職の都合を優先する形で決まってゆく。

亡くなった当日はそれ以上のことはせず、遺体を仏間の次室で北枕に寝かせ、枕元に白い布をかけた小さな机を置き、その上に、向かって右にろうそく立て、中央に香炉、左に花立てという三具足の枕飾りを用意する。その晩はそのろうそくと線香の火を絶やさぬよう2、3人が交代で夜通し遺体に付

き添う。これを「仮通夜」といい、その間に親戚や手伝いに来た近所のものは葬式用の「紙華作り」を行う。

この「紙華作り」は「花きり」とも呼ばれ、葬式時、祭壇の横に飾るハス、ボタンなどをかたどった造花づくりのことである。材料は和紙や金銀の色紙と竹で、まず長さ1メートルほどの竹を小指弱ほどの細さに割り、そこに花をかたどった金・銀・白の色紙をさしてゆく。技術に長けたものが中心となり、紙を切る係、花をネル(折る)係、金銀以外の色紙を作る場合には紙に顔料で色をつける係など、それぞれの役割分担がなされスムーズに作業は行われた。材料は、寺や紙華作りに長けたものの家に道具とともに常時用意してあり、急な計報の場合もすぐ対応できるようになっていた。これを作るのは主に男性の役目で、女性はお勝手仕事に回った。作成される場所は、自宅で葬儀が行われる場合は自宅で、寺での葬儀の場合は寺で、通夜までに作成された。

また、作られた紙華は、葬儀終了後も汚れていない場合、寺で保管され、次回の葬儀に使用される。紙華を借りたものは、借りた家に対し現金でなく、ろうそくや海産物、山芋や干し柿やそばといった旬のもの、ソウケ(竹箆)などの物品でお礼にあがった。これは現金収入のあまりない時代ならではの物々交換的礼儀であった。

(2) 集落による違い

大沢以外の集落では、葬儀の手伝いを親戚如何を問わず集落総出で行うが、大沢では世帯数も人数も他集落より多いため、あらかじめ葬儀を出す家から各家から出る手伝いの人数が指定され、それにあわせて手伝いに出た。これは葬儀後の、手伝いの人に対するお礼の関係、主に金銭的なものが関係しているであろう。

また紙華作りにおいても大沢以外の集落では集落総出で行うが、大沢では亡くなった家の隣組、例えば、5組で葬儀が出た場合、4組と6組の両隣の組がこの紙華作りを任された。もしこの二組の中に紙華作りに長けたものがない場合のみ、他の組からその技術者を呼んだそうだ。

(3) 現在までの変化

現在では葬儀の大部分を葬儀会社に一任してしまうことが一般的となっており、計報の連絡や諸手続き以外、喪主や親戚、集落のものが出ているような仕事はなくなった。また葬儀日程の決定では、僧侶の都合優先というより斎場の予約を最優先にするようになった。

紙華作りに関しては、最近だと大沢で2、3年前に実際の葬儀で行われた。7、80歳のお年寄りが中心となり行われたそうだが、これはきわめてまれなケースであり、実際には昭和45(1970)年ごろに出現した輪島の花屋の台頭によって、この紙華作りも消えつつあるのが現状である。

個人的な意見としては、生花で彩られた祭壇も荘厳で美しいが、縁のある人々に思い出されながら作られる紙華に彩られた祭壇も、さぞや美しかったであろう。現実の大変さを知らないが故の理想論かも知れないが、民間芸術ともいえるそれが途絶えてしまうのはなんとも口惜しい気がする。

2-3. 納棺～通夜

(1) 以前のあり方

翌日の昼になって納棺が始まる。身内が見守る中、桶状の棺桶に遺体を納める。

この納棺の前に、あらかじめ遺体は遺族の手によって体を拭かれ、髪を剃られ、または剃るまねをされ、その後手を合わせ、正座か胡坐をかけた状態に組まれる。このとき、形が崩れないよう日本手ぬぐい(木綿)やさらして遺体は固定され、手には数珠がかけられた。このように遺体をある一定の形にすることを、「足を組む」「仕上げる」、または単に「組む」といひ、「縛る」や「カラゲル」といった表現は物を対象にしたものゆえに不相当とされた。遺体を組むのは近親者の役目で、死後硬直が始まってしまった場合、骨を折ってでもその姿勢にさせため、見ているものの中には耐え切れず目をそむけてしまうものもあったようだ。

棺桶は訃報が伝えられた後、集落の大工、または大工仕事に長けたものによって作られる。葬儀後火葬してしまうため、造りは簡素なものであり、隙間が目視できるようなものもあったという。だが一方では、富裕者が豪華絢爛な棺桶を生前から作らせる場合もあり、家や人物によってさまざまであったようだ。

棺桶の底には新聞紙が敷かれ、火葬時に火が着きやすいように豆柄などもともに入れられた。また棺の中には「南無阿弥陀仏」と書かれた「棺書」が貼り付けられ、自然な、人間的感情から棺に合掌礼拝したときでも、故人の遺体に礼拝したのではなく、いまは浄土に往生して阿弥陀仏と同じ悟りを得ている故人に対して、または阿弥陀仏に対して合掌礼拝しているのだという浄土真宗の基本的理念が息づいていた。だが実際には、そのような意味を理解したうえで棺書が使われているということを知っている俗人は少なく、ただ純粋に故人を無事あの世に送り届けてくださいという祈りの表れであったのだろう。

また棺桶には装飾として寺から借りられた七条袷袋(敷被《シキオイ》)が掛けられた。この七条袷袋は大変高価なもので、借りるにしても大きな布施をしなければならなかったようだ。

その後、夕方から夜にかけて通夜が営まれる。通夜は「夜伽」ともいわれ、仏間に棺桶を置き行われる。棺桶の周りには集落総出で手塩にかけて作られた紙華が並び、故人の死が惜しまれ、追慕の念が新たにされる。夜も深更となると、「通夜ぶるまい」といって通夜客をもてなす食事と酒が用意された。これは精進料理を主とし、日本酒やビールなどの酒類も来客者に一通りいきわたる程度に用意された。お通夜の勤行が済んだ後は、身内の者を残し、他の者は家に帰るならわしとなっていた。

(2) 現在までの変化

座棺は昭和 35, 6 (1960,1) 年ごろまで使用されたが、道路が整備され霊柩車が輪島の斎場まで走れるようになると、寝棺に取って代わられた。そのため遺体を正座や胡坐の形に組むことはなくなったが、遺族の手によって身体を拭かれたり、胸の上に手を合わせ数珠をかけるなどのお清めはなされている。

また葬儀関係のものは一式葬儀屋に頼むことが一般化している中、大沢地区では、公民館倉庫に組み立て式の祭壇が1組、同じく組み立て式の棺、骨箱が3、4セットが常備されていて、急な訃報時貸し出されている。

通夜に関しては、仕事の都合上通夜のみ参列者が多くなり、また、通夜ぶるまいに関しても車ですぐ輪島に帰る人が多く、以前のように盛大に行くことは少なくなった。これによって喪主の家では多少の金銭的負担や弔問客の世話などの負担が軽減されたものの、故人を惜しみ、悲しみを分かち合うというかけがえのない時間も同時に減ってしまったと嘆く方もいた（70代男性）。

2-4. 葬儀

(1) 以前のあり方

葬儀は早朝から始まり、午前中には終わらせる。以後に言及する「灰葬づとめ」を、火葬開始のその日のうちに行うためだ。

弔問客は現在と異なり、案内のあったものだけが訪れ、遠い親戚や顔見知り程度のものには事後連絡のみ行われた。そこで、故人と親しかつたにかかわらず案内が来なかった場合、揉め事になったそう。また、後述する焼香の順番についても、進行役のものが血縁関係や縁の深いものから呼んで行われたため、毎回その順番でも揉め事が起こったという。この焼香の順番や案内、お斎時の席順などの相談は、最初の日の日程や人足割の相談の後行われ、親族内の年寄りに確認が行われた。しかし、葬儀という人間にとって一大行事のあわただしさの中で、冷静且つ迅速に故人の交友関係などを明らかにするのはとても困難なことで、多少の手違い、不行き届きは否めないものだった。逆に言えば、そのような血縁関係、縁の深さに慎重で、尊ぶ姿勢こそが、それだけ親類、縁者の関係の濃密さを表している。

葬儀参列者は香典と御仏供米を持参し、この米の量は血縁関係の度合いによって異なった。親族は3升以上、そうでないものは1、2升が一般的だったが、貧しいものや米が不作で獲れなかった年などには5合米にするなど、その人、その年に対する対応がみられた。酒をともに持参するものもあり、香典帳には酒の量に関係なく「酒1樽」と記載された。また旬の野菜を持参するものもあり、香典とともに持参するものには肉魚類を除けば特に規制はなかったようだ。

いよいよ葬儀が始まり、焼香となる。この焼香は現代と異なり、二つに分けられて行われる。まずは、出棺勤行(内葬礼《ウチゾウレイ》)が行われる。これは家の内のもの(＝女性)との別れのための焼香であるので、仏間の次室で女性が先に焼香する。このとき僧侶は仏壇に向かっておつとめを行う。その後、僧侶は仏壇を閉め、棺を家の中央の部屋に移し、棺に向かって僧侶が再度お勤めをする中、男性が焼香する。これを葬場勤行(野葬礼《ノゾウレイ》)といい、元々は火葬場(野)での焼香である。つまり、この二つはかつて別の場所で執り行われていたのだが、部屋を移動することで場所の違いを出し、この二つをより簡潔に執り行ったのである。

そして葬儀終了。このとき驚くべきことは、故人に供えられたお供え物を老若男女、葬儀参列者そ

ろって取り合うということである。服を捲し上げてまで取り合うものもあり、集落外から嫁いできた女性はその光景に心底驚いたという（70代女性）。

(2) 現在までの変化

弔問客については、現在の葬儀では一般的なように遠い親戚も顔見知り程度の仕事関係のものでも、特に案内がなくとも来るもの拒まずといった姿勢で招き入れる。

香典については、昭和40（1965）年あたりから香典とともに御仏供米が持参されることはなくなり、御仏供米料込みでの香典料となっている。

焼香時にみられた出棺勤行と葬場勤行の違いも、現在ではさらに簡略化され、出棺勤行が終わった際、ろうそくを立て替えることで葬場勤行との区別を残すのみとなっている。また焼香時の厳密な順番も、現在では家ごとのくくりで呼ばれたり、または順番は特に指示しなかったりよりオープンな状態に移行している。だが、いまだにその順番や食事のときの席順などには暗黙の了解的な部分も少なからず残っているようだ。

2-5. 出棺～火葬

(1) 以前のあり方

葬儀終了後、男性数人で棺桶をみこし状の輿の中に入れ、上に屋根状のものを被せて、玄関や縁側から出棺する。この輿は村の共同使用で、寺に保管してあったものを用いたり、新しくこしらえたりする。また屋根状の日覆いについては、それができた当初、その使用は上層階級のものだけに限られていたが、仮葬具が集落内での共同使用になって後に例外なく使用されるようになったようだ。出棺に関しては、棺をどこから出すかについていろいろなわけがあるが、浄土真宗の教義には明記されておらず、玄関が狭ければ縁側から、など柔軟に考えてよいようである。棺の担ぎ手を「オンボ」といい、血縁に近いものほど棺桶に近く、白無垢、白足袋装束であった。また、葬列参列者も全員が白装束で、故人と親子関係のものだけ裸足で火葬場に向かった。小さな子供の中には輿にぶら下がるものもあったそうだ。

火葬場に着くと僧侶によって最後のお勤めが行われ、最も血縁関係の近いものによって火がつけられる。その後、火葬場の係である「野仕（のーし）」を残し、親族はいったん家に帰る。この野仕は一回の火葬に3人から多いときで7、8人ほどつき、火葬場の火が絶えぬよう番をする。親族はこの役には選ばれないため、家によって野仕になるものは異なる。

この火葬場はビョウシヨ（廟所）と呼ばれており、どの集落の火葬場も人家を離れた山中にあった。実際に大沢の火葬場跡地まで歩いてみたのだが、細く滑りやすい山道で、冬場雪にでも覆われたならば、棺桶を入れた重いみこしを担ぎながらの行列は、さぞ労力のいったことだろうと思われた。火葬場のつくりとしては床のない小屋で、小屋の中央付近に石で積み上げられたかまどのようなものがあった。そのかまどの上に輿をそのまま乗せるか、または棺を輿から出して茶毘に付したのだそうだ。

遺体とともに燃すものとしては、故人の着物、布団のほか、紙華、輿、ろっぽ（六角形のちょうちん）なども次回の葬儀のために残さない場合は、ともに燃された。

火葬の燃料には割り木が用いられ、これは林道や、作業道の整備といった村総出で行われる行事の折に、合わせて用意された。そのようにして用意された割り木は、火葬場の周囲に積み重ねておくのだが、新しく切り出したまだ乾いていない割り木が一番下に来るよう、一度積み上げておいた割り木をすべて崩してやり直さなければならなかったため、大変な重労働だったそうだ。また、割り木のみでは遺体がきれいに焼きあがらない場合が多いため、喪主の家から2、3俵の炭が出されることもあった。急な計報で炭が家にない場合には、炭焼きをしていた同じ集落のものに頼んで炭を分けてもらっていたそうだ。

いったん家に戻った参列者たちには、「お斎(オトキ)」という精進料理のお膳が振舞われる。場所は葬儀を出した家ではなく、その隣家を借りて行われた。交通網のまだ発達していない時代のため、輪島の市街地にはおいそれと出られるものではなく、また参列者たちもすぐには帰ることができなかったため、お手伝いを含めて全員にお膳が振舞われたのである。お膳の内容としては、煮物、漬物、かじめ（海草）の煮つけなど、地元のもの、季節のものを利用した簡素なものだった。このとき、香典とともに持参された御仏供米を炊き出しに使うこともあったようだが、各家、各集落によって使用しないところもあったようで、そのときの状況に応じて使い分けられたのだと思われる。

(2) 現在までの変化

葬儀を大きく変える一大要因となったのが、この火葬場の移行だろう。

昭和29（1954）年、西保地区が輪島市に合併してから、火葬場も輪島のものを利用する流れがでてきた。そして昭和32（1957）年から37（1962）年がその移行期となり、集落の火葬場を利用する場合と半々に葬儀は執り行われた。現在では輪島の火葬場利用のみとなり、集落にあった火葬場は山の緑に飲み込まれようとしている。

この変化によって輿を担いだ葬列は消え、参列者の服装も一般的な喪服に変わった。だが、喪主のみまだに白装束をまとって、故人を送り出すのだという。

お斎については、公民館という新たな地域共同使用のスペースができた大沢村では、そこで用意し振舞うことができるが、他集落においては交通網が発達し車が普及した現代、輪島の市街地へ一時間とかからず出ることができ、また飽食の現代、49日の忌明け続く精進料理の風習は守りがたく、輪島市内の料亭などで食事をとってしまうのが一般的だ。葬儀一式を葬儀屋に委託するようになったことで喪主の金銭的負担が大幅に増え、参列者全員にお斎を振舞うことが困難になったという声も聞かれた。

2-6. 野見舞い〜骨あげ

(1) 以前のあり方

遺体を焼き始めて数時間後、親族のものが酒一升、煮しめを持って火葬場に戻ってくる。焼き手をねぎらった後、遺体に新しく割り木を乗せ、頭骨（額部分）、または灰の一部を野師に取り出してもらい白紙に包んで持ち帰る。これは次の「灰葬づとめ」を火葬開始のその日のうちに行うためである。

「灰葬づとめ」は「還骨づとめ」ともいい、仏壇の横に村共同使用の祭壇を使って行われる。まず、その祭壇の上に先に預かってきた頭骨を置き、僧侶にお勤めをしてもらう。その後、仏となった頭骨を仏壇の中央、もしくは向かって左側にあげ、終了となる。仏壇が小さく、お骨が置けない場合は祭壇に置いたままにする。後日、頭骨は京都の本山へと納められることとなる。

火葬開始日の翌日、焼きあがったお骨を拾い骨箱に納める骨あげが行われる。このとき、前日にとった頭骨とともに骨箱に納める場合もある。骨箱は49日法要まで自宅に置かれ、49日の法要のあと墓に納められる。

(2) 現在までの変化

火葬が一時間かからず終了してしまう現在では、野見舞いといった、時間をかけて行う火葬に付随した慣習は消えてしまった。だが、灰葬づとめは葬儀のお勤めの一環として行われている。このとき使用する祭壇もまた、葬儀屋が一式用意してくれるものを使用する。また、現在では遠方の親族などの都合で、初七日を引き上げ還骨勤行の後、続けて初七日のお勤めを行ってしまうのが一般的となっているようだ。

2-7. 初七日〜各法要

(1) 以前のあり方

初七日は葬式の翌日、僧侶を再び呼んで行われる。お勤めの後、親戚にお膳を振る舞い、計四日間の葬儀の労をねぎらう。その後は七日参りといって、七日ごとにお参りをする。計7回、つまり49日までおこなわれる。がしかし、実際にはこの七日づとめを5回目終えたあたり、つまり葬儀から30日ほどたって切り上げられてしまうものが多かったようだ。毎回のお勤めの後にはお膳が振舞われ、故人が惜しまれた。

そして49日法要。これは忌明けともいい、親戚、縁者を呼んで僧侶にお勤めをしてもらう。その後納骨が行われ、お骨の一部は京都にある本山に納められる。この49日法要で精進料理も切り上げられるわけだが、以前は子供のみ、その発育のために卵食を許されていたという。

その後は、月命日、100日参り、一周忌、3, 7, 13, 17, 23, 25, 27, 33, 50回忌と法事が執り行われる。この時、23, 27回忌を行った場合は25回忌を行わず、25回忌を行った場合は23, 27回忌が行われなくなるようだ。また、上大沢では1, 5, 7, 13回忌を行い、3回忌は行わない。5回忌からの法要が重要視されるようだ。

(2) 現在までの変化

各法要については、以前と比べてさほど変化はなく行われているようだ。やはり一番の変化としては、精進料理の扱われ方だろう。お斎の項でも言及したが、飽食の現代では逆に肉魚類の入らない食事のほうが珍しく、味気なく感じてしまうため、49日間の遵守はし難いのだろう。また、精進料理の遵守よりも親戚、縁者への振る舞い、交流を重視しての変化ともとれる。

3. 住民の意識、そして『葬儀の心得』なるものの存在

以上のような葬儀の変化を西保地区の方々はどうのように受け止め、感じているのだろうか。今回話を伺った方々は主に70歳前後で、皆さん高度経済成長や市町村合併などのさまざまな時代的流れの中を生きてこられた方々である。それゆえにか独特のたくましさや凛々しさを漂わせており、また現在の生活にあった葬儀様式の変化に対して、昔と比較して是非を問うような姿勢は見受けられなかった。だがしかし、感情的部分において現在の葬儀形態をどのように考えるか尋ねたところ、「昔のように集落全体が協力し、亡くなった人を惜しんで、思い出を語り合いながら葬儀を作り上げていくことが理想。自分も最期はそのようにして温かく見送られたいが、今のご時世なかなか昔のように手間のかかることはできない。仕事の都合や近所とのつながりが昔よりの薄くなってしまったこと、あとは特に高齢化が原因となっているが、これはどうしようもない。」(60代男性)という声や、「昔は集落の協力によって葬儀が成り立っていたため、さほどお金がかからなかった。だが、現代では葬式代として生前からかなりの貯蓄をしておかなければならない。悲しいことだ。」(60代男性)という声も聞かれた。皆さんそれぞれ現在の葬儀形態について思うところがあるようであったが、しかしそれは以前の葬儀形態への逆行を望むものではなく、昔ながらの集落が一丸となった風習への回顧、そして現在西保地区が抱える少子高齢化問題、近所や血縁関係の希薄化、拡散に対する心痛の表れではないかと私は受け取った。

また、このようにみてゆくと、葬儀の風習や社会環境の現代化ばかり強調されてしまうが、それだけではない。平成18(2006)年に、真宗大谷派能登教区第七組から『葬儀の心得』なる冊子が各門徒の家に配布され、それは別段以前の葬儀形態を取上げているのではないが、浄土真宗の教えを守り、今日の社会の生活様式の変化、即ち①都市化による儀礼主義化、②共同体から離れての私事化、③家族・親族の地域拡散化に伴った儀礼の変化を正し、葬儀本来の意義を見つめ直そうという動きがあることも確かなのである。事実、今調査実習の聞き取りにおいて葬儀のことを尋ねると、この『葬儀の心得』を取り出し、話し始める方が多数いらっしやった。そこに私自身、壇那寺と門徒の、そして浄土真宗の深い根付きを感じることができ、以前のような集落を挙げての葬儀はできないものの、その根底に流れる宗教と人々の生活の密着度、「真宗王国、石川県」と言われる所以を垣間見た気がする。

社会環境、時代変遷に伴う葬儀形態や生活様式の変化は、どの時代のどの地域においても見られる

ことだ。昔と今を比べ、昔のよさを嘆くのは簡単だが、現代の生活、社会環境の変化を真摯にみつめながらも、それに即した葬儀、仏事の意義を問い直そうという動きがあること、『葬儀の心得』なる冊子が配布され、住民の拠り所のひとつとなっていることが、現在の西保地区での宝のひとつではないだろうか。

4. おわりに

この調査実習報告書を書いている、まさにその最中に祖父の訃報が届いた。数年前から病院の入退院を繰り返していたため、もう長くないとわかっていながらも心構えはできていなかった。それから何度、この報告書を書き上げる中でその葬儀を思い出しただろう。つらかったが、物心ついてから参列した葬儀は今回の祖父の葬儀が初めてであり、それまで聞き取り調査や文献記述からの想像でしかなかった葬儀が、実際のものとして私の中で実を結んだのも事実である。

その葬儀を思い返し、西保地区での葬儀の変容と結び付けて考えてみる。確かに葬儀屋任せの現代の葬儀はスムーズで、悲しみの中において頭の回らない遺族にとっては非常に大きな助けとなった。だがしかし、ただただ指示されるがまま、機械的に事務的に処理されている点も垣間見え、悲しくもあった。かといって、遠方に散り散りになっている親戚や近所の方を集めて、葬儀の準備を一から行うなど現在では不可能だ。時代の流れによってさまざまなものが遷りゆくように、葬儀のあり方も変わって然り。西保地区での葬儀の変遷も、必要があったからこそものだろう。

ただ、どんな形式や時代の変化、宗派や地域の違いがあっても、強く存在し、葬儀の核となるのは、死者を思う気持ち、それに尽きる。西保地区における以前の葬儀のあり方に、若干の憧れの感情を覚えるが、現実に即した現在の葬儀のあり方も、その核である死者を思う気持ちがあれば十分にその儀式的役割は果たせていると思う。われわれはつい、昔の風習に憧れや理由無き肯定感を持ってしまいがちだが、時代に即したその変遷にそれほど悲観する必要はないと思う。悲観するのならば、そのような変遷に至った背景、原因を見極めなければならない。社会のつながり、時代変遷の影響などを強く思い知らされた調査だった。

また、フィールドワークを行う者として、このように私個人の感情や出来事を調査結果と比較し、共感するのは間違いかもしれないが、しかし、すべての人間に平等に訪れる「死」、そして死者を送る儀式である「葬式」にこれだけいろいろな視点を持って当たれたことは、非常に貴重な経験となった。